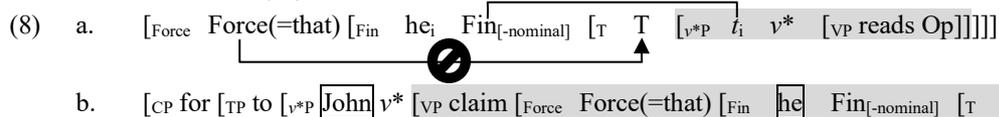




このシステムの下では、(1b)の束縛関係は下に示される形で構築される。



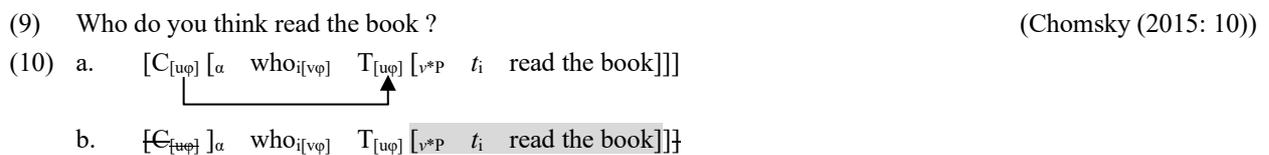
(8a)は(1b)の埋め込み *that* 節の構造を示している。Force の位置にある *that* は統語素性を一切持たないため、T に  $\phi$  素性が継承されることはない。Fin は[-nominal]の素性を持っており (cf. 岩崎 (2021))、v\*P 指定部にある *he* と Agree 関係を結ぶことで格を認可すると共に、その指定部に *he* を引き付ける。T が  $\phi$  素性を持たないため  $\langle \phi, \phi \rangle$  ラベルの付与が不可能であるが、その代わりに、T そのものがラベルとして機能する (cf. Mizuguchi (2017))。T が  $\phi$  素性を持たないことにより重要な効果として、(8a)では v\*P が転送されることとなる。(8b)は(1b)の *for* 以降の構造である。不定詞の意味上の主語である *John* は、v\*P 指定部に基底生成する。Quicoli の枠組みを(8b)に当てはめれば、v\*の補部に当たる VP が転送される際に、v\*P 指定部にある *John* が *he* と同一指示である情報がインターフェースに送られることとなり、*John* と *he* の束縛関係が適切に得られる。

この統語派生により、言語事実①及び言語事実②が帰結として導出される。言語事実②に関して付言すると、これには Fin による最小探索が関与する。(8a)に示したように、Fin が Agree 関係を結ぶのは主語の *he* とであるが、目的語は Fin から見て主語よりも構造的に遠い位置にあり、また、Fin が主語の一部と Agree 関係を結ぶためには、主語を同定した上で更に深く探索しなければならない。

一方、言語事実③については、先行詞が目的語の場合、主語よりも構造的に低い位置にあることから代名詞と同じタイミングで転送されることとなり、先行詞の目的語と代名詞が同一指示であって良いと誤って予測してしまう。しかし、この先行詞の主語指向性は長距離束縛が一般に示す特性であり (They<sub>i</sub> told us<sub>j</sub> that pictures of each other<sub>i/\*j</sub> would be on sale.)、長距離束縛に関する一般理論によって独立に説明される可能性がある。

#### 4. That 痕跡効果との比較

Chomsky (2015) は、補文標識 *that* が省略されることによって *that* 痕跡効果を示すことなく容認されるようになった(9)のような文に対して、(10)に示すような統語派生を提案している。



(10a)において C から T への素性継承が起こって(10b)で C が削除されるに伴い、C のフェイズ性が T において活性化されて v\*P が転送されるようになる。この「T が派生的にフェイズになる」という事態は(8a)でも同様に生じている。Grano and Lasnik の束縛代名詞の事例と英語で *that* 痕跡効果が観察されない事例には、見た目上の相違を超えて共通の統語的仕組みが背後に控えていることが見て取れる。

#### 5. 結び

3 節で示した本論での分析は、Quicoli の枠組みに決定的に依拠している。従って、「極小主義に則って束縛理論を再定式化するには、転送に基づくのが有望である」という示唆が、理論的含意として得られることとなる。Safir (to appear) が Grano and Lasnik に対し反論を展開している状況もあるが、今後の研究課題としたい。

#### 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP18K12410 及び JP22K00525 の助成を受けている。

**主要参考文献：**Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies, and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 1-16, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia. / Grano, Thomas and Howard Lasnik (2018) “How to Neutralize a Finite Clause Boundary: Phase Theory and the Grammar of Bound Pronouns,” *Linguistic Inquiry* 49, 465-499. / 岩崎宏之 (2021) 「中英語期・初期近代英語期における補文標識 *that* の文法化に関する一考察—*That* 痕跡効果の欠如・出現の観点から—」, 日本英文学会第 93 回大会 Proceedings. / Quicoli, A. Carlos (2008) “Anaphora by Phase,” *Syntax* 11, 299-329. / Saito, Mamoru (2017) “A Note on Transfer Domains,” *Nanzan Linguistics* 12, 61-69. / Satik, Deniz (2021) “The Maximal Size of Infinitives: A Truncation Theory of Finiteness,” ms., Harvard University. [Available at: <https://lingbuzz.net/lingbuzz/005910>]